

一月作品

月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

あをぞら迫る

古屋祥子群馬

はうき草いまはコキアとカタカナで派手にいろどる丘南面を
山の上のコスモス満開と聞きたれば繁華街抜けてくるま馳せゆく
「鼻高山見晴らしの丘」畝ごとにつづくコスモスにあをぞら迫る
花畑に咲く花はなの一つひとつ名を読みましてしばし遊ぶこころや
背高き黄蜀葵とろあひの大ききはな抽んでて咲くひとの頭上に

あきの呼吸

小島 ゆかり 東京

みづいろの日傘帰りは雨傘になりて歩めり九月の街を
ギター弾きギターのやうに鳴り出づる九月のあをい夜の少年
ギター弾く少年のまへ過ぎんとし過去のどこかへ踏み入るごとし
アイス持つところで泣く子人生はあるときふいにだいなしになる
乾きあまる石は各々濡れてゐる川は全体であきの呼吸す

月の傷

島田 暉 神奈川

天窓の文字なき空を見上げたり文字に疲れし午後の図書館
夕靄の底にのんびり寝ころびて鬱といふ字の溶けてゆく辞書
うつ心開きて立てり秋空の月の傷より花こぼれくる
鉄兜折る指先は戦中の光重たくまとひ始めぬ
草芒抜きてきたりし血まみれの手を持つ老いは悪童らしき

われとは何ぞ

橘 芳 園 新潟

伝道につれまはされし子の述懐寺の子われの思ひにかさなる
寺継ぐを母も強ふると思ふとき少年は庭に蛇を殺しき
手鏡を地面に置いて映す空に少年は落ちてゆきたかりけり
僧辞めて糸切れし凧どこへ飛びどこへ落ちててもよき身となりぬ
僧厭ひ僧辞めし身をまた厭ふ寺に生まれしわれとは何ぞ

☆

☆

水島晴子 兵庫

奥村晃 作* 東京

音なくて人影うごき窓向かう小雨の花圃に苗を植ゑゆく
うるはしき褐色の葉の散りほひて桜木ひと木解脱の途上
しろみどり小さきしづくのかたちもて金木犀の蕾あらはる
没りつ日の征矢をかへして身ぐるみの真紅めざまし高層一基
この国が世界が紊る^{みだ} われらみな苦しみながら生かされてきて

武田弘之 神奈川

森重香代子 山口

全くの孤児になりたる少年の川端康成作家を目指す
定稿を成すまでの努力精進を例へば名作「雪国」に見つ
徹夜して書ける「美しい日本の私」の文推敲激し
絵模様の千羽鶴美し川端康成ノーベル文学賞賞状脇に
ノーベル賞受けて聞なきに自裁せる川端康成のこころ知りたし

高野公彦 千葉

日影康子 富山

ロシアには狂つた古稀の男ゐる隣国も遠き国も苦しむ
疫病や戦争があるこの星に水在りて草も蝶も生き継ぐ
長浜の渚の砂の濡れてゐて客人のごと流木ありし
老人の増加が国を亡ぼすといへど亡んだ国はまだない
過ぎてゐるところがむしろ長所かな蛇長すぎる歌古すぎる

正に(死地に赴きし)老軍医なる四十五歳の米川稔
「自決ではなく病死かも」新説を交えて松村正直語る

脚返りの筋肉痛をこらえつつ退き行くを待つ真夜に目覚めて
グレタトウーンベリ・Z世代の言い分を聴くべし地球危くなりて
資本主義が地球が先に駄目になると叫びしトウーンベリの声が木魂す

没つ陽にかがやく海を見はるかし段丘に経たる三十余年か
目語にて足りゐたる日の恋ほしかりひとの声なき単身の日日
癖ある馬に能ありといふ喩へあり癖とふ程のもの無しわれに
二度三度読いてもわからぬ歌のありわが老耄のすすみゆくらし
人の声聞かざるままに今日の日も暮れむとするなりさびしき山居

大気澄む秋の御堂に家族そろひ夫の百ヶ日忌の阿弥陀経をあぐ
介護にて瘦せし15キロの戻らねどテレビは朝よりダイエツト特集す
新聞に長らく寄稿せし短歌コラムを辞めて白内障の手術日を待つ
大ぶりの梨切りわけて青磁いろの小鉢に盛りぬああ平和こそよし
白内障の手術せし右眼の眼薬をうつかり左眼に注してしまひぬ

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

買ひおきしアイスクリーム食べぬまま秋冷ははや現し身つつむ
鳥のこゑ子供のこゑに苛立てり悪老人となりゆくわれは
二度咲きの金木犀のこと告げる妻よ好老人となりゆけ
秋のバラ消えたる家は陽と風を受けしづかなる時を守れり
学生の七十年代思ひ出づ下村光男の遺歌集繰りて

桑原 正紀 東京

木畑 紀子 京都

鬱気味の浅田次郎を気にかけてゐしが嬉しや愉し新作
ひさびさの涙と笑ひのてんこ盛り浅田次郎の『大名倒産』
電車にて読むにふさはぬ浅田次郎笑はせ泣かせ乗り過ごさせる
乗り過ごしたるに気づきて次の駅までの五分を立ちてまた読む
忽ちに下巻の半ば過ぎたればゆつくりと読む味はひて読む

狩野 一男 東京

大松 達知* 東京

まちがひはうさぎとうなぎのみならず浅田次郎と赤川次郎
用有つて中大杉並高を知り浅田次郎の母校とも知る
兄ふたり疾うに世に無く我ひとりかつかつ七十二までは生きむ
三鷹台駅前広場整備工事やつと始まる十月 が来た
東京都シルバーパスは利用せずバス通ひせり長きコロナ下

くれなるの梅のひとひら半ばよりのほりゆくなり落花のなかを
雨降る日鳥獣魚介のなか行けり傘を差す不思議な奴と見られて
にんげんの行き先何処雨の夜の街をただよふ透明傘無数
野にひとり立派に咲ける山百合とひととき交はず無言の対話
机上なる鉢植老子サボテンとときをり交はず無言の対話

感染をさせてごめんと自死をせしひとありきコロナはじまりころ
コロナ怖く辞めし力士もコロナ死の力士もありき相撲はつづく
一夜さの樹のひとりごと大き小さき落ち葉を朝の門に掃き寄す
蜻蛉はやはり精霊とびめぐる群れを撮せどみなおぼるなり
朝やけのまど開け夕やけのまど閉ぢぬ半日の無事をよろこびとして
嫌だったことやらされていたことのアまたありその中の剣道
治す薬でないからずつとつけているつければ紅くなるけれど
青森の黒ニンニクの元氣くんこのごろ食はず元氣なゆえに
自動車にも腕時計にも革靴にもまったく興味なくて男だ
最後には塩舐めながら飲むようになるらしいまだになってはいない

田宮 朋子 新潟

清水 正子 神奈川

秋晴れの深山みやまのほそき径のはて山田あき歌碑たんぜんと立つ
大杉の木下の山田あき歌碑はしづかにものを問ひくるとし
大叔母の山田あきとおもひでを汲むがに語る村松研氏
山をゆく秋の一日ひとひはわれにあり蜻蛉せいてんにありて空澄みわたる
天地あめつちに宇宙の律は満ちみちて秋かぜのなか柿いろづきぬ

津金 規雄 神奈川

小嶋 一郎 佐賀

耐へに耐へし思ひは怒りとなりて爆はつわれ狂へるか 汝答へよ
声に出すや怒りは劇しく増殖しひかりあまねき部屋うちなに響る
わたしの中で何かが壊れた修復はたぶん出来ない確かに壊れた
精神の動脈硬化と人は言ふ然さなり然れどもせむすべもなし
悔恨の眠りより覚むちかぢかと来る足音はおのが心拍

小山 富紀子 京都

後藤 美子 北海道

ふと思ふ草に光りしつゆの玉もう長く見ず街は乾きぬ
「薄」にもルビふるやうにと求められ秋の七草総ルビとなる
読めぬなら読めざるままにそよがせよルビは重しと薄がさやぐ
ジヨロウバナと読まるは嫌あたしにはルビを頂戴、さうをみなへし
暗転の真つ暗がりに消え残る二八娘のびらびらかんざし

コロナ禍の巢籠もり抜けてわれは聴くギターリストが紡ぐ弦の調べを
いづみ湧くやうなトリルに耳澄ますああ鬱積のもろもろ飛んでけ
甘美なる(エストレリータ)弾く指が白く閃く陽炎のごと
クラシックギターが醸しだす香氣コロナ疲れの髪膚にぞ沁む
床の間に腰掛けてギター弾きぬしよぼろろんぼろろ遠き日の兄
籠り居のあそびごころに辞書を繰り「野阜のづかさ」の語に傍線を引く
「野阜」の用語を知りてわが住まふここが然さうだとひとり頷く
テレビ視るわれと厨に立つ妻に時間ときはこの日も疎密をつくる
連れ立ちて出でゆく先を尋ぬれば娘は「福岡へ」妻は「博多へ」
脚立より墮ちて肋骨折ししとき「身の程知れ」の声は聞かずき
ひと吹きをかけて落して網戸閉づカMEMシ用殺虫剤残りすくなし
取り木して増やせる斑入りゴムの木を頒げんと並べおく玄関先に
植替へを待てる幾鉢手つかずに冬に入らんかしみじみ老いぬ
古びたる両膝なだめ右腕に力をこめて電車の段上る
「思はじ」とうたひて「思ふ」を止められずさびしきものよ老ゆといふこと

福士りか 青森

田中愛子 埼玉

一人居の父の昼餉の干し餅のほんのひとかけ咽をふさげり
むせかへる父を目守りて小半時かたはらにゐし鯛ひ猫ぞよき
「そばに在るだけでいいよ」とムード歌謡うたふごとくに猫を呼ぶ父
白鳥の渡りゆく空見上げたり窓の結露をぬぐふ肉球
紅葉を縫ふはつゆきのいくすぢか岩木の嶺の晩秋の贅

藤野早苗 福岡

水上比呂美 東京

バッグからマーマレードサンド ユーモアを忘れず七十年の治世に
かの夏のロンドンスタジアム007に^{ダブルオーセブン}いたかれ天降りたまへり
「太陽の沈まぬ国」を七十年照らし続けしひと薨れり
天秤の支点あるいは歯車のひとつ目かの人をたとへて言はば
ブライアン、フレディ、ロジャー、ジョンそしてエリザベス笑む みんなクイーン

風間博夫 千葉

鈴木竹志 愛知

時政に始まる執権十六名、三名除き名に「時」が付く
鎌倉幕府執権に「時」付かぬ名は北条正村^{まさむら}宗宣^{むねのぶ}貞顕^{さだあき}
家康に始まる将軍十五名、四名除き名に「家」が付く

江戸幕府将軍に「家」付かぬ名は秀忠、綱吉、吉宗、慶喜

題詠の題となり歌に詠む意欲わきたり辞書でネットで調べ

ことのほか秋は絵描きの友が欲し個展のもぎりなど手伝ひたし
やきいもに噎せつつくしやみまで出でてまことにぎはし秋のお三時
泣かぬ日と泣ける日ありて友のふみ届きたる日は泣けてしまふ日
工事場の「頭上注意」にあふぐとき過ぎゆく秋の青さに遭へり
ゆつくりと歩める君が振りかへるとき生まれたり秋のゆふかぜ

かしのみのひとつ手前で曲がりきて知らない道に落ちるわが影
調布市を散策しつつ角曲がり隣町よりまた出られない
五十分まへに通つた細道にまた来てしまふ学習塾の裏
角三つ曲がればもとへもどるはず行けども行けども角があらざる
西調布駅前にある（さわやか信用金庫）の「さわ」が見えてゆふぐれ

どんぐりの不作つづけば美濃にゐる熊も三河に下りてくるやも
どんぐりが欲しくてならない熊たちもいまだ三河の平野には来ず
猿投山^{さな}あたりに熊の出没の噂はあれど数十キロ先

拾はれぬままのどんぐり公園の芝生に転ぶ手持ち無沙汰に
公園のどんぐり集め熊の住む山ふところ撒きに行かむか

原賀 瓊子 東京

西ぞらに後の月あり東にはペガサスのあり北半球、真夜

ペガサスをひだりに仰ぎその目もて右手にあふぐ月こそ大き

こそ詠んで記憶にきざむ(後の月) ことしは月の背後もひかる

月光の蒼きに伴てばわが背の^{せな}だいたい色の窓を意識す

月ひとつ、見る身もひとつ遠くとも一対一に後の月あり

水上 芙季 神奈川

「モロモロと分離します」と豆乳のパックにあつて短歌的朝

一人では選ばない色、孔雀緑のカットソーをこの秋に買ひたり

アマプラがいやネットフリでもフルーか どれでもなくて透明になる

「焼き直しのテレビ番組多いよね」「焼き直して何焼いてるんすか」

マンモグラフィ撮つてくれる看護師の口から克蘭ベリーの香り

大野 英子 福岡

さうじつの朝の埠頭の突端にときをり鰻が跳ねる音する

遠景の霞むがごときうなはらをひるがへる鰻の腹の真白さ

高速艇の立てるしらなみ愉しげに弾ける港に入りくるとき

博多港を出る(ヴィーナス)の白波のドレープの裾のやうな広がり

ひつしさが伝はる海鵜の羽ばたきに勇気を貰ひさあ帰らうか

松尾 祥子 東京

あきぞらの青きはまりてうつしみの息ふかく吐き吸ひ込みにけり

ふはふはの雲のやうなる帽子編む子よ二ヶ月を産院に臥し

「いつ来たの?」「いつも聞く母 孫の婚と曾孫と暮らし二ヶ月経るに

孫ブル、気づかふ子らがそれはそれ「今日助けて」とラインが届く

四歳児はおーツとするを見てをれば「考えてるの」ぼつり一言

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一五-一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三十四〇八